ティー・ブレイク

NO. 92

洗濯機の中の幸せ

最近，テレビで「片付けられない女」の番組をよく見かける。「片付けられない女」とは，長期にわたり掃除をまったくしない女性のことだ。

それほどではないにしろ，私が「片付けるのが苦手な男」に属することは，私自身の認識からしても，周囲の人達の認識からしても，どうやら間違いなさそうだ。事務所の私の机の周りも，自宅の部屋のなかも，たまに掃除はするのだが，いつの間にか乱雑さを増し，次第に無秩序状態へと移行してしまう。しかも私の意識のどこかに「自然法則（エントロピー増大の法則）に逆らうのはよそう。かりにも発明に関わる職に就いているのだから。」と，この状態を半ば肯定しているような節さえあるからタチが悪い。

こんな私であるからして（一人暮らしの男性の多くがそうであるように），洗濯も非常に億劫である。そもそも，部屋に散在する衣服の中から「使用前」のものと「使用後」のものとを識別するのすら難しい。このような技術的課題を誰かが解決してくれれば（例えば，体温程度の温度が一定時間持続すると衣服のタグ部分が変色し，「使用前」と「使用後」との識別が可能な衣服），私ももう少しは邪魔くさがらずに洗濯をするようになるかもしれない。

しかし，そのような便利な衣服は発明されていないようなので，私は未だに原始的手法，つまり，主には視覚により対象衣服の美観に基づいて判断し，副次的には触覚，最終手段的には臭覚により「使用後」の衣服を識別し（迷うときは「フェールセーフポリシー」を適用），それをじゃまくさそうに洗濯籠に詰め込み，しぶしぶ近所のコインランドリーへと向かうのだ。

だいたい洗濯なんて，私に言わせれば極めて非効率的な行為である。たった一日着たくらいで，いかほどの汗や皮脂が衣服に付着するというのか？ しかも，汗の殆どは水分として蒸発するから，残りの塩分や各種ミネラル分，たんぱく質などは極微量である。そんな微量の付着物を衣服から除去するため，大量の水と時間，エネルギーを投入する行為を一生続けるなんて壮大な無駄なように思っていた。

ところが，あることをきっかけに私の洗濯に対する気持ちは大きく変わった。洗濯がとても楽しいのだ。そればかりか，洗濯の間じゅう洗濯槽の中をニヤけた顔でずっと見つめている。その視線の先には，ぐるぐる回る水流の中で私の大きなTシャツとあの人の小さなTシャツとが仲良さそうに絡み合っている。

こんなささいなことで，心の奥がほんのり暖かい。

その小さなTシャツの持ち主とはもう会わなくなってから随分経つが，それでもたまに，こんな風に大小のTシャツを一緒に洗ってみたくなる。

あの人への想いを洗い流すことは，まだできそうにない。

こりゃ，私が「気持ちの片付けが苦手な男」であることも，どうやら間違いなさそうだ。

乾燥機から取り出した温もり残るその小さなTシャツに顔を押しあてると，ほのかに洗剤のいい匂いがした。

（部長）